



日本の詩歌

18 宮沢賢治

中公文庫

中公文庫

日本の詩歌

18

宮沢賢治



中央公論社

©1974

中公文庫

日本の詩歌 18

宮沢賢治

昭和四十九年十月十日初版
昭和五十四年九月十日新訂初版
昭和六十一年六月二十日新訂四版

発行者 嶋中鵬二

整版印刷 三晃印刷

カバー トープロ

用紙 三菱製紙

製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七

振替東京二―三四

ISBN4-12-200148-X

定価 六八〇円

目次

春と修羅

5

春と修羅 第二集

125

春と修羅 第三集

199

春と修羅 詩稿補遺

260

文語詩篇より

315

三原三部・装景手記より

336

疾中より

343

補遺詩篇より

349

歌曲

360

短歌

詩人の肖像

鑑賞

年譜

串田孫一

中村稔

368

宮
沢
賢
治

心象スケッチ

春と修羅

序

わたくしといふ現象は

仮定された有機交流電燈の

ひとつの青い照明です

(あらゆる透明な幽霊の複合体)

風景やみんなといつしよに

せはしくせはしく明滅しながら

いかにもたしかにとりつづける

因果交流電燈の

大正十三年四月、宮沢賢治は詩集『春と修羅』を自費出版した。四六判三百二十ページ、定価二円四十銭、一千部刊。彼はこれを詩集とはよばず、「心象スケッチ」と傍題した。収められた作品は、大正十一、二年の二年間に書かれたもので、この時期は、岩手県稗貫郡立稗貫農学校（後の岩手県立花巻農学校）の教師時代のほぼ前半に当る。その後の作品を後に賢治自身「春と修羅」第二集と名づけて編集したことから、出版されたこの詩集を第一集とよぶのが、数次の全集編集に際しての例であった。本書は昭和四十八、五十一年筑摩書房刊の『校本宮沢賢治全集』を底本としているが、この校本全集では第一集とはよんでいない。しかし便宜上、この鑑賞中では第一集とよぶこととする。

第一集に収められた作品をすべ

ひとつの青い照明です

(ひかりはたもち その電燈は失はれ)

これらは二十二箇月の

過去とかんずる方角から

紙と鋳質インクをつらね

(すべてわたくしと明滅し

みんなが同時に感ずるもの)

ここまでたもちつゞけられた

かげとひかりのひとくさりづつ

そのとほりの心象スケッチです

これらについて人や銀河や修羅^{しゅら}や海胆^{うに}は

宇宙塵をたべ または空気や塩水を呼吸しながら

それぞれ新鮮な本体論もかんがへませうが

それらも畢竟こゝろのひとつの風物です

て書き終え、詩集として刊行するに際して記した、いわばマニフェストがこの序である。そして、ここに賢治は、彼の作品が「心象スケッチ」であることを宣言する。「わたくし」賢治は、自然の風物や周囲の人々と一緒に、「せはしくせはしく明滅しながら」ともりつづける電燈の照明である。その照明が自然の風物や周囲の人々を映しだすのであるが、賢治自身が時間の流れ、空間の交渉の中での一つの存在なのである。これを、彼は「有機交流電燈」と言い、また「因果交流電燈」という言葉で表現する。

第一集の作品は、過去二十二ヶ月の間に紙とインクで書き留められた、賢治の心の風景のスケッチである。しかし、彼が心を感じるものは、また人々が共通して心を感じるはずのものなのである。

人は空気を呼吸しながら、うに

たゞたしかに記録されたこれらのけしきは

記録されたそのとほりのこのけしきで

それが虚無ならば虚無自身がこのとほりで

ある程度まではみんなに共通いたします

(すべてがわたくしの中のみんなであるやうに

みんなのおおのなかのすべてですから)

けれどもこれら新世代沖積世の

巨大に明るい時間の集積のなかで

正しくうつされた筈のこれらのことばが

わづかその一点にも均しい明暗のうちに

(あるひは修羅の十億年)

すではやくもその組立や質を変じ

しかもわたくしも印刷者も

それを変らないとして感ずることは

傾向としてはあり得ます

は塩水の中に生きながら、銀河系の星たちは宇宙に浮遊する微粒物質を食べながら、それぞれの存在のほんとうの意味を考えるであらうし、ここに収めた詩篇はその契機を与えるであらうが、それも結局は心に映った風景の一つにすぎない。ただ、一度たしかに記録された賢治の心の内部の風景は、そのまま読者の誰もが心の内部にみているはずなのだ。もしこれらの詩篇に現われる風景が虚無的にみえるとしても、それは人々の心に共通した虚無的な感情なのだ。なぜかといえば、彼の存在が時間と空間の交渉の中で、四囲と一緒に明滅する存在だからであり、言いかえれば、彼の心の中に誰にも共通するものがあるのと同様に、誰の心の中にも万人に共通するものがあるはずだからである。

この賢治の宣言は、いわば主観主義の極致である。せんじつめれ

けだしわれわれがわれわれの感官や

風景や人物をかんずるやうに

そしてたゞ共通に感ずるだけであるやうに

記録や歴史 あるひは地史といふものも

そののいろいろの論料データといつしよに

(因果の時空的制約のもとに)

われわれがかんじてゐるのに過ぎません

おそらくこれから二千年もたつたころは

それ相当のちがつた地質学が流用され

相当した証拠もまた次次過去から現出し

みんなは二千年ぐらゐ前には

青ぞらいっぱいの無色な孔雀が居たとおもひ

新進の大学士たちは気圈のいちばんの上層

きらびやかな氷窒素のあたりから

すてきな化石を発掘したり

あるひは白堊紀砂岩はくわきの層面に

ば彼の心に感じるもの以上に確実な実在はなく、これはまた万人に確実に感知されるはずのものである。だから自然や周囲の変化にまかせて詩人みずからの心に映じてくる事実を忠実に記録し、それによって、詩人は読者のすべてに共通した心の光と影とを探ろうとする。そのような詩法こそ、二年間の詩作を通じて賢治が自覚的に会得したものであった。

この詩集をことさら「心象スケッチ」と傍題したことは、このような詩法の自覚に基づくが、一方で、これらの作品が詩とよばれる範疇はんしゅうにはいるかどうかは、賢治の意に介しないところであった。既成の詩という概念からはみだしてしまふもののあることを、彼が知っていたと理解してよい。そのゆえにこそ、この詩集が、わが国の詩の歴史に新しい衝撃を与えることとなったのである。

透明な人類の巨大な足跡を

発見するかもしれません

すべてこれらの命題は

心象や時間それ自身の性質として

第四次延長のなかで主張されます

大正十三年一月廿日

宮澤賢治

もつとも、この序はひきつづいて、これらの詩篇が地質学的にいつて新生代沖積世に属する現代において、正しく記録されたものではあっても、歴大な時間の流れからみれば、一瞬ともいえる短時間の間に、別の真実が発見されるかもしれない。それも我々が時間的空間的な制約の下におかれた存在である以上、しかたないことだという反省につづき、だから二千年も後には、と、想像の翼を広げていく。

* 白堊紀 地質学上、中生代の最後の期をいう。約一億二千万〜六千万年前、爬虫類が栄え、羊歯類などが繁茂していた。

前記のとおり、本書は『校本宮澤賢治全集』を底本としているが、読者の便宜のため若干のルビを加えている。以下の作品についても同じである。

春と修羅

屈折率

七つ森のこつちのひとつが

水の中よりもつと明るく

そしてたいへん巨きいのに

わたくしはでこぼこ凍つたみちをふみ

このでこぼこの雪をふみ

向ふの縮れた亜鉛あえんの雲へ

陰気な郵便脚夫きやくふのやうに

(またアラッデイン 洋燈ランプとり)

急がなければならぬのか

周囲は明るいのに、自分は暗い雲の方向へ急いで行かねばならない。そういう詩人の自覚を主題としたこの作品で、詩集『春と修羅』は始まる。事実、この作品を書くことにより、賢治は習作期を脱して、詩人としての道を歩きはじめたのである。

* 七つ森 国鉄田沢湖線小岩井駅のかたわらに点在する七つの森。

「(アラッデイン 洋燈とり)」は、『千一夜物語』中の「アラッデインとふしぎなランプの話」に由来する。魔法のランプをとりに行くアラッデインのように、という比喩である。

くらかけの雪

たよりになるのは

くらかけつづきの雪ばかり

野はらもはやしも

ほしやほしやしたり黝くろんだりして

すこしもあてにならないので

ほんたうにそんな酵母かうぼのふうの

朧おぼろなふぶきですけれども

ほのかなのぞみを送るのは

くらかけ山の雪ばかり

(ひとつの古風こふうな信仰です)

若い賢治を囲んでいた自然は暗い。その中で、「たよりになる」もの、「あてにな」るもの、「ほのかなのぞみ」を詩人は模索している。この作品を貫くものは、どこか甘美な青春期の憂愁である。

なお、鞍掛山は岩手山の東南麓、小岩井農場の北方にある。前作の七つ森は同農場の西南に当るから、賢治は光に背を向け、北へ向って歩いているわけである。

日輪と太市

日は今日は小さな天の銀盤で

雲がその面^{めん}を

どどん侵してかけてゐる

吹雪^{フキ}も光りだしたので

太市は毛布^{けつと}の赤いズボンをはいた

カーバイト倉庫

まちなみのなつかしい灯とおもつて

いそいでわたくしは雪と蛇紋岩^{サベントイン}との

山峽^{さんけつ}をでてきましたのに

これはカーバイト倉庫の軒

「太市は毛布の赤いズボンをはいた」という末行によって、読者はその前四行の自然観照から突然東北農村の生活に引き戻されるであらう。賢治にとっては、銀盤のような太陽も、赤い毛布のズボンをはく農民太市も、ともにたしかに実在であった。この二つの方向がないまぜにされながら、賢治の世界が豊かに展開することとなる。

「カーバイト倉庫」は、国鉄釜石線岩根橋駅前の情景といわれる。

すきとはつてつめたい電燈です

(薄明^{はくめい}どきのみぞれにぬれたのだから

巻烟草に一本火をつけるがいい)

これらなつかしさの擦過は

寒さからだけ来たのでなく

またさびしいためからだけでもない

恋と病熱

けふはぼくのたましひは疾^{はや}み

烏^{からす}さへ正視ができない

あいつはちやうどいまごろから

つめたい青銅^{ブロンズ}の病室で

透明薔薇^{ばら}の火に燃される

ほんたうに けれども妹よ

「(薄明^{はくめい}どきのみぞれにぬれたのだから／巻烟草に一本火をつけるがいい)」とささやくのは、詩人の内心の声である。風景に向いあっている詩人が聞く彼自身の内心の声、あるいは詩人が向いあっている農民の声、それらの正確な記録が、賢治の詩作の交響的世界を形づくる。その萌芽を、この作品に認めることができる。

妹は病熱に苦しんでいるのに、自分の心も重くてつらいので、看護の手をさしのべてやることもできない。そういう引き裂かれた姿勢が、やがて妹の死に臨んで、「無声慟哭^{むせいどうく}」における悲劇的高揚となる。この作品は、そういう意味で「無声慟哭」の母胎である。

けふはほくもあんまりひどいから
やなぎの花もとらない

春と修羅

(mental sketch modified)

心象のはいろいろはがねから
あけびのつるはくもにからまり
のばらのやぶや腐植の湿地
いちめんのいちめんの詔曲模様
(正午の管楽くわんがくよりもしげく
琥珀のかけらがそそぐとき)
いかりのにがさまた青さ
四月の気層のひかりの底を
唾つばきし はぎしりゆききする

仏教思想で、いつさいの生物は
善悪の業因によって六つの迷界
(六道)にいき別れるという。六
道とは、地獄道、餓鬼道、畜生道、
修羅道、人間道、天上道である。
修羅道にあつては、嫉妬猜疑の心
が強く、戦闘を好むといわれる。
また、修羅は阿修羅の略であり、
阿修羅とは、本来生霊、神霊の意
であつたが、悪神の意に転じたとい
う。

賢治が「春と修羅」とこの作品
を題し、また、「おれはひとりの